

決意表明とは何か

—学校内の言語行動—

大 浜 るい子
(1994年9月9日受理)

Ketsui-Hyomei—Was ist das für ein Sprechakt ?

Ruiko Ohama

Im vorliegenden Aufsatz wird versucht, durch die Beobachtung von mündlichen Sprechhandlungen, die Schüler am Anfang eines Schuljahres als Ketsui-Hyomei (=ihre eigene Bemühungsziele vor dem Lehrer und den Kameraden äußern) gemacht haben, darauf hinzuweisen, daß es kein Sprechakt ist, wie wir so meinen, sondern nur eine Art Begrüßungsakt, um in unserer Gesellschaft zwischen stellungunterschiedlichen Partnern kooperativ zu handeln. Was die Schüler als Bemühungsziel selektiert haben, gehörte alles zu Normen von Schule. Und auch die dabei gebrauchten Satzformen zeigen uns, daß es da keine Subjektivität, sondern nur Gehorsamkeit gibt.

0. 序

一僕は6年生になって、姿勢を正しくすること、落ちついて行動をしたいです。それと6年、あの××小学校の最高学年として立派な6年生になりたいです。

学校では、新しく学年が始まる時に、生徒たちにこのようなことを言わせることがある。それをここでは「決意表明」と呼ぶ。こういうことが一つの行為として確立し、それに固定した命名がなされているのかどうかは知らないけれど、恐らくこういうことを言わせられた経験は誰にも一度や二度あると思う。最近では、学年の始めに「学級開き」と称する行事があるようで、「その中でそういうことをさせることはよくあります」と現場の先生に聞いたことがある。口頭で言わせることもあれば、作文に書かせることもあるそうである。

私はある年、小学校の授業参観においてこの決意表明を聞く機会があった。初めの一人、二人のうちは微笑ましく、またある種のなつかしさを覚えながら聞いて

ていた。しかし、次から次に表明されていく決意を聞いているうちに、これは一体いかなる行為なのだろうかかと思議な気持がしてきた。それは、私にとって覚えのない、何か訳のわからないことが言われ出したからではない。どの子供の表明も、なじみのあるものばかりで、その意味ではなんの不思議もないのだが、その意味づけと言うか、行為としての理解というか、それが微妙に違うのである。私たちには、いろいろな行為、例えば、約束や忠告、挨拶などを行うことができる。しかしそれだけではなく、同時にその行為を行うことがどういうことをしたことになるかということについても知っているのである。ところが、「決意表明」に関しては、確かにそれを行うことはできる。しかし、果たしてそれが一体何をしたことになっているのかという点について、私たちは本当に知っているのだろうか。

以下に示すのは、実際に、ある小学校で行なわれた「決意表明」の内容分析である。私たちが了解している「決意表明という行為」とのギャップは、単なる誤解というようなものではなく、巧妙に仕組まれた社会

化の過程に気づいていなかっただけであり、小学校時代の「決意表明」は多くの社会的制度的行為の原型学習になっているのではないと思われるが、これはそれを明らかにするための予備作業である。

1. 決意表明とはどんなことをすることか。

まず、決意表明という行為を私たちがどのようなものとして理解しているのかということを確認しておく。30人の大学生に「決意表明とはどんなことをすることですか」と尋ね、自由に書いてもらったところ、次の5つの内容が含まれていた。

- 1) 「自分が」「自分自身が」立てた、あるいは「自分の」決めたことである……………24人
- 2) 「決めたこと」「成し遂げること」「目標」「意志」「思うこと」「考え」であること……………29人
- 3) それらを人前で言うこと、表わすこと……………21人
- 4) 自分の不十分な点と思われることを目標とする……………6人
- 5) 「意志、心構えを強める目的で」皆の前で言う……………4人

最大公約数的に見れば、「自分が成し遂げようと目標に決めたことを人前で言うこと」と言ってよいだろう。目標にするのは、「自分の不十分な点である」という4)の指摘は、以下、実際の表明文を見るとその正しさが証明されることになるわけだが、数の上では2割と低い。また5)のなぜ人前で言わせるのかということに関しては、一割強の人しか書いていない。他に理由があるのか、あるいはそもそも理由を問うこと自体が意識にのぼらなかったと言うべきだろうか。それはともかく、私がこの大学生たちの理解を見て強調したいのは、誰もが決意表明をする人の主体性を前提にしているように見えることである。どのような目標を立てるにしろ、自分が考え、自分が決めるものであり、かつ自分が意志すると了解していることである。後で見えていく小学生たちの先生も「6年生になってこんなことを頑張りたいとか、こんなことを続けたいとかいったことを聞かせてほしい」と言い、主語としては一人称しか取らない「たい」という形でそれを表している。

「本人の主体性」などと言うと、中には口の悪い人がいて、「いや、子供の方だって適当に言っているだけで、すんでしまえばそれっきり。すぐに忘れてしまっていますよ。」と言うかもしれない。もしかしたら現実はそのようなところかもしれない。しかし、私はやはり決意表明というのは「本人の主体性」が前提にされていると、一般に了解されているのだと言いたい。そ

れは、Searleの「誠実性の規則」と同じであって、たとえ現実には守られない、あるいは守るつもりなどさらさらない約束であっても、約束という行為をすることは「守るつもりである」という誠実性の規則をも満たしてしまうのである。(1)や(2)の文がおかしくないのに、(3)が変なのはそのためである。

(1) 「月末にお金を返すと約束したが、実際は返さなかった。」

(2) 「月末にお金を返すと約束したが、実際は返すつもりはなかった。」

(3) *「月末にお金を返すって約束します。けれど実際は返すつもりはありません。」

確かに、決意表明には約束ほどに社会的な拘束力はない。現場の先生に聞いてみても、その後のある段階で、決意表明で言ったことが守られているか、また実際に目標に達したかどうかのチェックは一切ないらしい。子供も先生も言うてみれば、その場限りという面はあるかもしれないが、たとえそうであっても、その場限りのその場にあつては、即ち発話の時点にあつては、実現への努力の意図があると考えべきである。でなければ、(4)が変であることを説明できないことになってしまう。

(4) *僕は今度は本をたくさん読もうと思いますが、読むつもりはありません。

繰り返しになるが、一般的に決意表明というのは、主体的な決定や意志や意図などが関わっている行為であると考えられているということを確認して、次に実際の表明文を見ることにしよう。

2. 資料の概要

ここで分析する資料は、愛媛県松山市内のある小学校で、6年生1クラス36名が参観授業において行った口頭による「決意表明」という言語行動である。分析者は参観者として臨席し、その発言内容をテープに取めた。子供たちはこの日にこのようなことをすることを予め聞かされており、何を言うか、家で準備してきた模様である。収録は1993年4月28日

3. 小学校6年生の決意表明

観察は、専ら「話者の主体性」ということを規準としている。私たちの知識、了解がそういうことであつたからである。結果を先取りして言うと、内容的にも形式的にも、主体性は示されながら、しかし示されないということになる。では具体的に見ていこう。

3-1. 子供達はどんな内容のことを決意したか？

36人はのべ78の決意をした。一人平均2.2個である。内容は以下のとおり。

(表1)

字をていねいに書く	10人
先生(人)の話をよく聞く	9人
姿勢を正しくする	7人
時間を守る	7人
クラブ・委員会で進んで活動する	5人
手をあげきちんと意見を発表する	4人
低学年に優しくする	4人
下級生に信頼され手本となる	4人
早寝早起きをする	3人
スポーツをする	3人
勉強する	3人
からだを鍛える	2人
忘れ物をしない	2人
学校を休まない	1人
無駄づかいをしない	1人
お手伝いをする	1人
給食をのこさない	1人
落書きをしない	1人
何でも頑張る	1人
マラソンを頑張る	1人
自分のことは自分でする	1人
本をたくさん読む	1人
授業に集中する	1人
立派な6年生になる	1人
自覚をもつ	1人
けじめのついた行動をする	1人
ブラックバスを釣る	1人
(聞きとれない)	1人
計 78	

期待通りだったのだろうか。それとも期待はずれだったのだろうか。いずれにしても、私たち日本人にとっては昔からおなじみの項目ばかりである。いくら時代が変わっても、子供たちは相変わらず同じことを繰り返しているのか。いや、そんなことはたいして驚くに値しないだろう。むしろ、ここで重要なのは、「ブラックバスを釣る」という1件を除き、すべてが常日頃先生や親から口喧しく言われていることであるという点である。これを見ると、決意内容というのは、良い生徒として、良い子として守るべきこと、大人たちから要

求されていることを口にするのであり、決して自分が自由に立てることのできる目標ではないことがわかる。中でも、「字をていねいに書く」というのを10人もの子があげているが、実はこのクラスの先生は「字をていねいに書くことはすべてに通じる」という考えから、これをその年度のクラス目標にしていたのである。それを考え合わせると、やはり目標設定に関して、子供の主体性を認めることはむづかしいと言わざるを得ない。ところがそう言い切ってしまうところにもむづかしさがある。というのも、では子供達は全く受動的に先生や親の言うことをそのまま繰り返しているのかと言うと、それは正確ではない。それぞれの子供のおかれた状況や、校内での人間関係、体の状態などをよく知っている人が聞けば、それぞれの目標はやはりその子供だからこそそれが選び出されたという面があるのである。そういう意味では、子供はあくまで自分の目標を立てていると言える。誰から言わせられているわけではなく、自分で決めたことを言っているのである。主体的ではないが、主体的であるというのはこういう意味である。こうして、ある範囲内での自由、条件付きの主体性を獲得していくことが、社会化の過程なのであろう。私たちは一方で社会や学校の規範をそのまま口にさせられながら、他方でそれは他ならぬ自分が立てた目標だと考えるように仕組みられているというわけである。

ところで、そうは言ってみても、ここの子供たちの決意目標はやはりあまりにも規範どおりに過ぎはしないだろうか。目標というからには、社会通念上悪いことだと考えられているようなことを言うことはありえないとしても、もう少し別のことが言われてもいいだろうに。「おいしいものを作れるようになりたい」とか「お小遣いをためてファミコンを買う」とか「今はこわいがニワトリ小屋に入れるようになりたい」とか「大きくなったら科学者になれるように頑張りたい」とか。こういうことは決意表明ではないのだろうか。もし、この36人の中にこういうことを言う子がいたら、聞いている者は何か違和感をもつだろうか。おそらくそんなことはないと思う。現に「ブラックバスを釣る」と聞いたときも、他の決意とそれほど違うとは思わなかった。しかし、こうして一覧表にして眺めてみると、やはり「ブラックバスを釣る」というのは例外であることがわかる。私は、これは、6年生という年令と関係があるだろうと思う。年令が低い分だけ、拡がりがなく、核の部分に集中しているのではないかと思うのである。彼らはすでに決意表明の何たるかを知っている。むしろ、年を重ね、規範に対して反省的であったり、規範というほどではないもう少し緩やかな規制力をもつ

たものまで視野に入れられるようになれば、目標内容は多種多様になり、だがそのためにかえって決意表明という行為自体の本質が分かりにくくなると言うことはできないだろうか。というのも、釣りを趣味にしている人は、決して「ブラックバスを釣りたい」ことを誰かに強制されているとは思わないはずだからだ。しかし、趣味をもつことは、自殺をすることに比べれば、社会から奨励され、あるいは少なくとも快く認められていることであることを考え合わせると、「ブラックバスを釣る」という決意表明にもやはり社会の規範を言わせられているという側面があるのである。

そういう意味では、内容的にも形式的にも単純で、コンパクトなこの6年生たちの決意表明は、見えにくくなっているこの行為の何たるかを私達に明らかにしてくれる格好の材料だと思ふ。

3-2 文の形式-心情表現について-

決意内容については上で見たとおりであるが、ではそれを一体どのような形の文にのせるのか。36人は合計84個の文を作った。84個の文というのは、終止形がもちいられた箇所を数えた数である。一人平均2.3個ということになる。その中で仮に「心情表現型」と呼んでおくと、「したいです」「したいと思います」「しようと思います」という終わり方をするのが33個もあるのである。即ち、ほとんど全員が2文からなる発言をして、必ずそのどちらか一方に心情表現を表わす文を使っていると言うことができる。

決意表明なのだから、決意、即ち話者の意図や意志、願望を表わす文がきても、それは決して不思議ではない。しかし厳密に言うと、決意と決意表明は同じ行為ではない。決意には心情表現型は欠かせない。しかしそうして行った決意を「人の前で言い表す」のに心情表現型は必ずしも必要ではない。

実はこの型以外の文で、非常によく出てくるのが他にある。それは「ことです」という終わり方をすること、29回という頻度である。即ち、決意内容を公表する、「人の前で言い表す」という目的なら、子供たちはこの形を使っているのである。

- (5) 私の6年生の決意は低学年に優しくして、みんな仲良くすることです。……
- (6) 私はえっとあつ本をたくさん読むことです。……
- (7) えっと僕の1年間の目標は字をていねいに書くことと、給食を残さず食べることと早寝早起きをすることです。……

では、心情表現型では何が言い表されているのか。一つは上の「ことです」の場合と全く同じ使い方である。自分の決意内容を公表するのに、この形を用いる

もので、次のような場合である。

- (8) 僕は5年あつ6年生になって字をきれいに書きたいです。
- (9) 僕は5年生の時、漢字ができなかったの、今年家で予習復習をしたいです。……
ただ、これは33個のうち10例しかなく、あとの23例は次のように使われる。
 - (10) 僕の6年生の決意は、あつ早寝早起きすることと、字をていねいに書くことと、姿勢を正しくすることです。今までにできなかったの、頑張りたいと思います。
 - (11) 私はえっとあつ本をたくさん読むことです。前は全然本を読んでいなかったの、今度は本をたくさん読もうと思います。
 - (12) 私も6年生になっての決意は字をていねいに書くことです。それを目標、目当てにこの1年間頑張っていきたいです。

これを見ると、決意表明というのは決して私たちが思っていたように、単に自分が決意したことを人の前で言う、単に自分の目標を人に知らせることではないことがわかる。それだけではなく、さらに加えて、決意という行為自体をその場でやって見せなければならぬのではないだろうか。

そう考えると、(8)(9)のような心情表現型の最初の使いは、決意という行為の遂行と何を決意したかという内容部分の提示を一つの文の中で同時にやってしまった例であると解釈できる。決意表明というのは、大学生が考えていたように、決意したことの内容(1.2参照)を「表わして明らかにする」(広辞苑より)ことではなく、決意という行為を表わして(=遂行して)、決意をしたということを明らかにすることだったのである。(8)(9)のように簡略版でやるのと、(10)(11)(12)のように内容提示と行為遂行を別仕立てでやるという違いはあるものの、36人中26人が心情表現型の文によって決意の行為を遂行している。面白いことに、この遂行はすべて発言を締めくくる形で、最後の文によってなされている。平均2.3個の文からなる短い発言であるから、どこに現われようと大きな違いはないかもしれないが、私には、最後という位置には意味があるように思われる。発言全体を締めくくる場所、その発言全体の意味を示す場所、行為のタイプを示す場所であるように思われるからである。

3-3 決意表明はなぜするのか、させるのか?

決意表明というのが決意という行為の遂行行為であることがわかったわけだが、これは一体なにを意味しているのか。子供達が目標としたことは、学校や社会

の規範であった。規範というのは、当然のことながら、学校や社会そのものの成立にとって重要なものであり、守られなければならないものだと言えるだろう。しかし、そのような規範に従うことと、規範に従うという決意の行為を人前でやってみせることとは別のことである。決意表明という行為がなぜ行われるかについて、大学生は「意志、心構えを強める目的」(30人中4人)をあげた。それもあるかもしれない。しかし、私は、これは社会や学校に対する従順さを示すこと、忠誠の誓いではないかと思う。決意表明は学校という制度を代表している先生の前でのみ行われる。もし規範が確かに大切なもので、子供たちには是非とも守らせたい、そして守ろうとする気持ちを強め育てたいということだけであれば、3-4で見えるような現象は現われないのではない。

3-4「ので」について

子供たちの決意表明には次のような「ので」という語が多く登場する。(36名中17名)

- (13) ……先生の話がよく5年生の時聞けなかったので、6年生になって先生の話をよく聞くこととえっと……することにしました。
- (14) ……それと自分の発表をあまり自分から発表できなかったの、6年生になってからは……自分の発表は自分から手をあげて発表したいと思えます。……

「ので」というのは「から」と同様、原因や理由を表していると考えがちだが、「から」が間違いなくそれらを表わすのに対し、「ので」はもう一つ明確ではない。それにこの決意表明に「から」が一度も使われないのも気にかかる。「ので」の部分「から」に置きかえてもさほど違いがあるようには見えないにもかかわらずである。また「pのでq」という際のpとqがプラスマイナスの違いこそあれ、ほとんど同語反復の形を取っているのも特徴的である。「ので」には「から」と違ってどんな意味があり、それが決意表明においてどういうふうに機能しているのだろうか。

永野(1952)は「「から」と「ので」の違いを一口に言えば」次のようになると言う。

「「から」は表現者が前件を後件の原因、理由として主観的に指定して結びつける言い方。「ので」は前件と後件とが、原因結果、理由帰結の関係にあることが、表現者の主観を越えて存在する場合、その事態における因果関係をありのままに、主観を交えずに描写する言い方。」(永野, 38)

すなわち、「から」も「ので」も原因理由を表わすが、「から」には表現者の主観的な関わりがあり、「

ので」にはそれがないということになる。この解釈に従えば、子供たちの「ので」は、決意の理由を表わしているが、子供たち自身がその理由づけに関わっていない、むしろその理由とそれによる決意は、すでに一つの事態として客観的にそこにある、それをそのまま叙述しているということになる。

規範が大切なものであり、それを守らなければならないということを理解させる、あるいは守ろうとする心を養うということに主眼がおかれれば、なぜそのような決意をすることになったのかという主体的な理由づけや関わり方が表現されるように、仕向けられるのではない。なぜ、子供たちは、積極的な主観的関わりが示せる「から」を用いないのか。改まった場所では「から」よりも「ので」の方が使われ易いという指摘(三井, 1980, 92f.)も、ここでは説得的ではない。たとえそうであったとしても、誰一人として「から」を用いないのは、やはりそれなりの理由があるのではないか。

子供たちが用いた「ので」の前件と後件の表現を比べてみよう。

- (15) 字をていねいに書くことができなかったので、字をていねいに書く
- (16) 勉強がちゃんとできなかったの、勉強をちゃんとする
- (17) つれなかったの、つりたい
- (18) 先生の話がよく聞けなかったの、先生の話をよく聞くこと
- (19) 姿勢が悪かったので、姿勢を正しくし……
- (20) 自分の発表をあまり自分から発表できなかったの、自分の発表は自分から手をあげて発表した
- (21) 全然本を読んでいなかったの、本をたくさん読もう
- (22) 人の話を聞いてもきぶをつけたりしていたの、人の話を聞いたりしたい。
- (23) 姿勢が悪いとよく注意されたの、姿勢をよくして必ず1日はいつも休んでいたの、あまり休みがないようにしたい
- (24) しょうもない落書き……今までやったのがたくさんあるので、それをやめる
- (25) いつも遅れていたの、(以下聞きとり不明)
- (26) 忘れ物が多かったので、忘れ物を(以下聞きとり不明)

前件と後件の表現は完全に繰り返してである。前件にはそれが「できなかった」というのがつけられているだけである。

田野村(1990)は「のだ」の多様な意味、機能から

それらに共通する基本的な部分を抽出すると、「ある事柄の背後にある事情を表わすということが出来る」(田野村, 36f.)という。そして、その背後の事情がたまたま原因理由となるのは、その事情が聞き手にとって未知の情報である時に限られているとして、次のような例を出し、説明している。

㉗ 気分が悪いからです。

㉘ 気分が悪いんです。

㉙ 天気が悪いからです。

㉚ *天気が悪いんです。

たとえば「どうして休むの?」という質問文は必ず「理由を表わす文」を答えとして要求するが、「気分が悪い」というのは「から」でも「ので」でも構わないのに、「天気が悪い」の方は「ので」とは結びつかないと言う。それはその情報が聞き手にとってわかりきっている内容だからだ(向い合って話している時に、天候状態は自明のこと)と説明している。田野村の考えにならって、子供たちの「ので」を解釈すると、少なくともこれらは原因や理由を表わしてはいないということになる。というのも、彼らのあげる内容は、その場で聞いている先生やクラスメイトや参観に来ている母親には周知のことであるからである。未知の情報にすることはそうむづかしいことではない。「勉強がちゃんとできなくて、僕は大変困ったので」「忘れ物が多くて恥ずかしかったので」と言えはすむことである。「僕が困る」「自分が恥ずかしい」ということは、本人しか知らない情報である。そういう工夫がなされないということは、やはり原因理由ではないのではないだろうか。

それでは一体何を意味しているのだろうか。田野村に従えば、その後続く決意の「背後にある事情を表わしている」ということになる。「先生の話をよく聞く」という決意をする(した)背後の事情が、「先生の話がよく聞けなかったということである」と言っていることになる。背後にこのような事情があり、その上でこのような決意をしたと言われると、そこにどうしても因果関係を見てしまいそうになるが、そうではなく、ただ二つのことを並列的に並べただけだということになる。

永野説をとっても田野村説をとっても、ここに出てくる「ので」には主體的な理由づけは認められない。あることを決意したり、努力目標にしたりする際に、自らとの関わりをつけ、理由づけがしっかりしていればいるほど、決意も固く、守られていこうと考えるのが普通である。なのに、子供達はそういうことが表現できる形を取ろうとはしないのだ。すなわち決意表明というのは、決して「心構えや意志を強めること」

に焦点が合わされた行為ではないのではない。

子供たちは規範を知っているだけではない。規範というのは、規範どおりではないという事態は即刻規範どおりにしなければならぬものであるということをも知っているのだ。その中に個人が入り込んで、理由づけをしたり問い直したりする余地はない。

3-5 まとめ

これまで見てきたことをまとめると、子供たちは学校や社会の規範をそのまま決意内容とし、それを心ひそかに決意するのではなく、そしてそれを報告するだけでなく、決意という行為を皆の前で実演することが要求され、しかもそこに、主體的な関係づけを許さない形が取られるということが明らかになった。私には、子供の自由にものを考える力、正しいことが判断できる力、論理的思考を養おうとする学校の中で、これはいかにも合わない、ちぐはぐな行為に思えるのである。ましてや、あるいは、学校は、子供たちがそれを自分が立てた目標であると思い込み、皆の前で公表するのは、それに到達しようと努力する気持を強化するためであると考えることができるように仕向けているのではないかと言ったりすれば、私だけではなく、おそらく学校自身も驚き、そんな意図はないと否定するだろう。

私はここで、学校教育のあり方を問題にしているのではない。決意表明をさせることの是非を問うているのではない。ただ、決意表明というものが実際どういうものなのかについて明らかにしようとしただけである。

私たちは自分の生活の基盤になっている社会規範や、自分のしている言語行為については、あまりにも身近であたり前なので、その意味や実体について考えてみようとしてもしないのが普通である。ここで示したかったのは、こうした無意識的な行為の中に隠れているものこそ、その社会の価値規準であったり行動の方向性を示すものであったり、即ちその社会の文化を形づくっているのではないかと言うことである。

決意表明といえば、学校という特定の場でのみ行なわれる行為のように思われるかもしれないが、名称こそ変わりはあるが、事あるごとに繰り返される行為であると言える。行為者(ここでは、生徒)が何らかの意味で人生の新しい局面(新学年)に入る時に、その社会集団を代表する人(先生)を前にして行う言語行動と言え、入社の際の挨拶や、結婚式での新郎新婦の挨拶、あるいは退職や転職の際の挨拶状の文句なども同じである。決意表明によって明らかになったことは、おそらくこれらを分析する時の道具となるはずである。

4 最後に——テキストの拡大可能性——

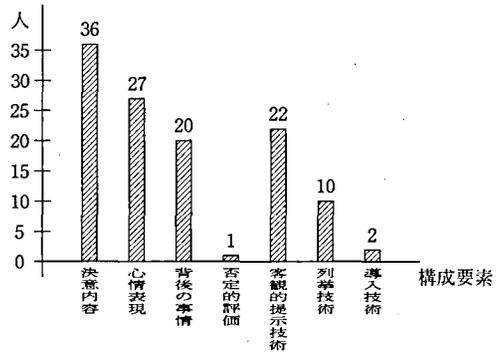
そういうことを念頭において、最後に、文、あるいはテキストの拡大の可能性について見ておきたい。この決意表明文は、一人平均2, 3個の文からなっていた。最も小さい原始テキストと言わねばならない。しかし、中には4つ, 5つの文を作った子供もいた。決意表明において、あるいは上にあげたような類似の行為において、どのような内容の文が結びついて、もっと豊かな大人の挨拶文へと拡大していくのだろう。

4-1 決意表明文の構成要素

子供達の決意表明文を構成しているのは、次の7要素であった。1) から4) は内容に関するもの。5) から7) は形式的なものである。

- 1) 決意内容：これを含まない決意表明はなかった。
(例)「字をていねいに書く」など表1に示したものの。
- 2) 心情表現：「したいです」「したいと思います」「しようと思います」の文によって示されるもの
(例)「…字をきれいに書きたいです…」/「…頑張ろうと思います」など
- 3) 決意に関わる背後事情：「ので」の前件部分に相当するもの
(例)「…自分の発表をあまり自分から発表できなかったので…」
- 4) 否定的評価：背後の事情に対する自分の評価
(例)「…授業中遊んだりすねたりしていました。そうすると6年生になったらとてもダメだと思います……」
- 5) 客観提示技術：「私の決意は…することです」で示すもの
(例)「6年生になっての僕の決意は……姿勢を正しくすることです。」
- 6) 列挙技術：決意内容が複数ある時の提示の仕方に関するもの。単なる並列と対比している。
(例)「私は6年生になって目標を二つ決めました。一つ目は忘れ、学級用具を忘れず持ってくることです。二つ目は……頑張ることです。」
- 7) 導入技術：6) と同様、提示の際の抽象化のレベルに関するもの。特に背後の事情との関連で登場している。
(例)「…僕は5年生まででできなかったことを中心に目標をたてました。…」

次のグラフは、要素別による利用個数を比べたものである。



(図1)

表2は一人一人の子供の発言がいかなる要素から構成されているかを示したものである。

(表2)

子供番号	構成要素	決意内容	心情表現	客観的提示技術	背後の事情	列挙技術	導入技術	否定的評価
1	m	■						
2	m	■						
3	m	■						
4	m	■						
5	f			■				
6	f	■						
7	f	■						
8	f	■						
9	m	■						
10	m	■						
11	f	■						
12	m	■						
13	m	■						
14	m	■						
15	m	■					■	
16	m	■						
17	m	■						
18	m	■						
19	m	■						
20	m	■						
21	m	■						
22	f	■						
23	m	■						
24	m	■						
25	m	■						
26	f	■						
27	f	■						
28	m	■						
29	f	■						
30	f	■						
31	f	■						
32	f	■						
33	f	■						
34	m	■						
35	m	■					■	
36	f	■						■

m: 男子 f: 女子

図1と表2から私は決意表明という行為の核になる文と、そこから拡大されていく方向性を読みとりたいと思っている。それが正しいかどうかは、さらに年齢のあがった生徒たちのものを見る必要があり、答は保留しなければならないが、とりあえず仮の結論を出して、今後の研究に委ねたい。

- 1) 決意表明は、少なくとも決意内容と心情表現から成っており、これが基本型である。
- 2) 拡大の方向としては、客観的提示技術と背後の事情がまずくる。6年生くらいになればかなりの子供がこの段階に達している。
- 3) 次の拡大は、列挙技術で、すでに使える子供も3分の1ほどいる。
- 4) おそらく次の拡大は、否定的評価と導入技術だと思えるが、6年生にはまだ獲得されていない。
- 5) 一般に言語能力では、男子より女子の方が早く成

長すると言われることがあるが、ここでも女子の方が男子よりも複雑な文を作る傾向にあることが見て取れるのは面白い。

引用文献

- 三井 昭子 1980：接続助詞「から」と「ので」について ことば1号，現代日本語研究会，90-102.
- 永野 賢 1952：「から」と「ので」とはどう違うか 国語と国文学11-1，30-41.
- Searle, John R. 1969：Speech Acts. An Essay in the Philosophy of Language. Cambridge.
- 田野村忠温 1990：現代日本語の文法I「のだ」の意味と用法，和泉選書